報　文

韓国ソウルにおける近代都市住宅の変化

小　泉　和　子*

Change of Korean Urban Dwelling in Modern Seoul

Kazuko Koizumi

はじめに

ソウルに行くと漢江のかなたに超高層のアパート群が山並みのように聳えているのに驚く。こうした高層住宅化によって伝統的な韓国住宅も大きく変貌をとげてきている。韓国の場合、近代に入ってからの住宅の変化が日本に比べてかなり遅く、1920年代からはじまっているが、急激に変化したのは1990年ころからである。そこでこうした韓国住宅の変化について、ソウルを例にとって、2004年夏小規模ながら調査を行ったので以下報告する。

ソウルの場合、住宅の変化と都市の変化とが連動しているので、最初に都市ソウルの歴史を簡単に説明する。

1. ソウルの歴史

(1) 建設当時の漢城とその後の変化

14世紀末に李成桂によって建設されたソウル（漢城）は、風水思想に基づいて位置が選択され、都市設計が行われ、計画された都市とされる。その形態は、北の北漢山を頂点に、東の龍馬峯、南の冠岳山、西の徳陽山をつなぐ、不整形の四角形が外郭であり、その中央に北の北岳山、東の駱駝山、南の木覚山、西の仁旺山と山々が屏風のように取り囲む不整形の四角形が内郭であり、内部の各峯を結ぶ形で城壁がめぐらされていた。<図1>内郭は東西に横切って清渓川（内水）の北に宮殿（景福宮・昌徳宮）、宗廟、社稷、官庁が配され、東の興仁門（東大門）と西の敦義門（西大門）を結んで幹線道路の鐘路が東西を貫通し、ここから景福宮と昌徳宮へと北に向かって参道がでている。漢城の正門は敦義門のやや南に設けられた崇礼門（南大門）で、これは中国・日本での朱雀門にあたる。崇礼門と鐘路も道路でつながっている。そのほかにも当時、七つの門が建造されていたが、門楼が重層構造をしていたのは南大門と東大門だ

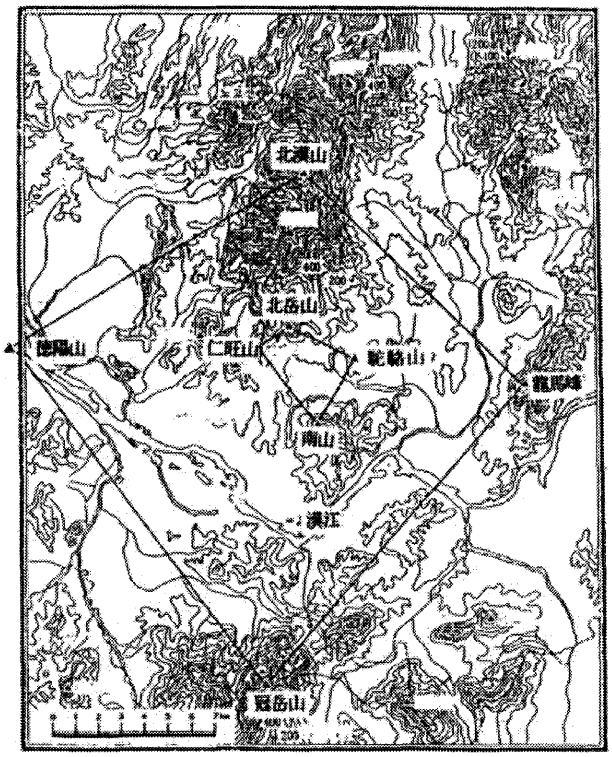


図1　ソウル周辺の地勢と風水（吉田光男「漢城の都市空間―近世ソウル論序説」）

*本学教授

けである。

内郭のさらに南には漢江（外水）が漢城を東西に横切って流れている。

漢城の中心は内郭で、景福宮の西には宮中で働く人々の、昌徳宮の西の北村には文官の住宅、また清渓川の南の南村には武官たちの居住区域があった。一般の商人たちは鐘路に沿って住んでいたが、住民の居住空間は外郭にも広がっていた。行政区画は当初から、城外に広がっていたが、17世紀後半から19世紀前半にかけて、城壁外へ市街地が拡大し、現在のソウル市域で江北と称されている漢江以北の地域が範囲内となった。つまり漢城は城内（街区）と城外（郊村）の二つで構成されていたことになり、この区域内に18世紀末から19世紀にかけて、およそ20万人（城内13～4万、城外5～6万）が住んでいたと推定されている。<図2>

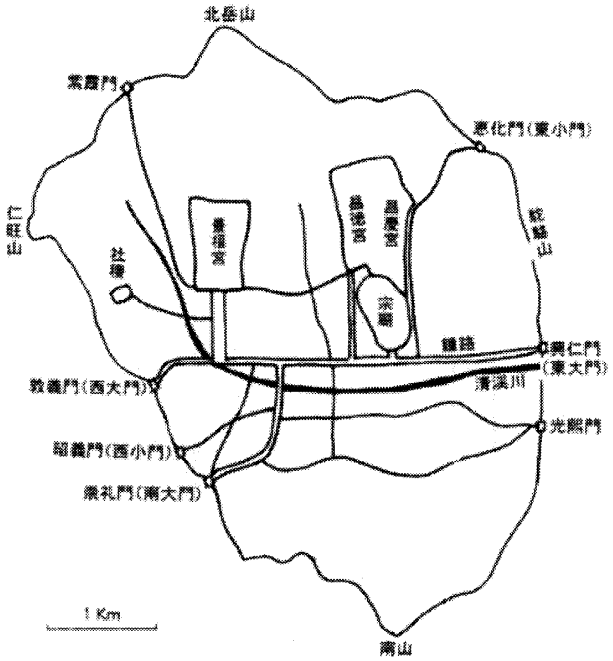


図2　都城内（内郭）の主要道路と施設<18世紀中ころ作成の「都城地図」より作成>（同前）

(2) 近代の変化

19世紀後半から20世紀にかけて漢城は大きく変わる。まず1876年の開国(日朝修好条約)、1859年の下関条約（日清戦争の結果）による中国の冊封体制からの離脱、1897年の国名変更（朝鮮から大韓帝国）と近代化が進んでいった。この時期、漢城の南部地域に清国人・日本人などの外国人が居住するようになった。

ついで1910年、日本により植民地化がおこなわれる。漢城は京城と改称され、日本の近代都市として大規模な都市改造が進められていく。都市計画街路網の決定により、幹線路の拡幅、新設工事が行われ、洞町制の施行で旧来の町の構成を解体再編成し、景福宮の前に総督府の新庁舎を建設するなど、風水都市漢城は「近代化」によって壊滅させられていった。こうした状況の中で、ソウルは何回かの画期を迎えることになる。

最初の画期は1920～30年代である。1910年に日本の植民地となったことから、20年代から30年代にかけて、多数の日本人が入ってきた。同時に農村からの流入人口の増加により、著しい人口増加がみられた。それまでの市街地は漢江の北の、朝鮮時代に漢陽（ハンニャン）と呼ばれた地域であるが、こうした人口増加にともなって、宮殿の周囲や南村、また鐘路沿いなどの都城の古い住居地域の敷地再分割がおこなわれた。その一方、都城の外に土地区画事業を行って新しく住居地域を造成した。前者は韓国の個人開発業者が行い、後者は日本の植民地政府が行った。これに対応して1936年には行政区域が拡大する。

次の画期は解放後の1950年代から60年代である。45年の日本敗戦で植民地から解放されるが、50年から53年にかけては朝鮮戦争に突入、このため50年代、とくに休戦後の53年以降は北朝鮮から大量の人口流入があった。また解放後のベビーブームに続いて60年代に入ると、ソウルの都市化が進んだことから韓国内の地方からの人口流入も激しく、これにともなって旧市街地の周囲が急速に開発され、拡大した。このうちには漢江の南、江南の国有地を無断で占有して、バラックを建てる人も多く、これがやがて市街地化していったというケースもあった。

三番目の画期は1970年代から80年代で、ピークは90年代である。1988年、ソウルオリンピックが開催され、韓国は経済復興期に入る。ソウル市内は満杯となり、江南の国有地に無断で建てたバラックを追い出して瑞草区に高層アパートのニュータウンが開発される。これらの高層アパートは国の場合は賃貸、民間は分譲である。中心地

が繁華になり過ぎて住宅環境が悪化したため、富裕層が移り住みはじめた。一方昔からの市街地も独立型の住宅は多世代住宅、あるいは商住複合住宅に変わり、アパートは高層となる。

さらに1990年代から2000年にかけて、瑞草区のさらに南の盆堂(ブンタン)にニュータウンが建設される。ここは30代後半くらいの家族が買える。2000年に入るとさらに盆堂の東にパンギョというニュータウン開発され、2010年から15年に完成の予定である。<図3>

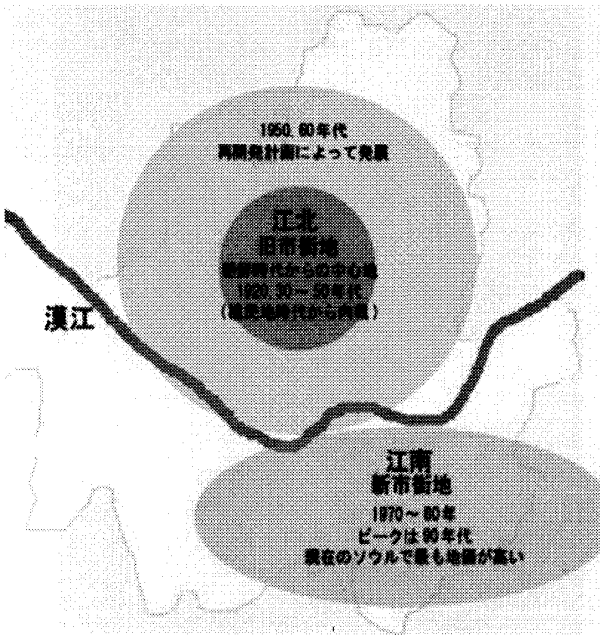


図3　ソウルの再開発模式図

2. 伝統的な韓国住宅

以上のような都市の拡大と連動して住宅も大きく変化していった。

まず1920年代から30年代に韓屋内での変化が始まるが、その前に伝統的な朝鮮について説明する。これには両班住宅（上流）、中人住宅（中流）、庶民階級の三種があるが、ソウルの場合、変化が大きかった都市住宅は中流住宅ないしは庶民住宅を基本としている。このためまずソウル地方の伝統的な庶民住宅と中流住宅について説明する。

ソウル地方型と分類される庶民住宅の主屋(アンチェ)（内棟(アンチェ)）の基本平面は、図4-1のようなL字型で、曲がった部分に釜屋(プオク)（台所）があり、これに内房(アンバン)が続き、板間(マル)が前方に面し、板間を挟んで越房(コンノバン)がある。釜屋は東西に面し、越房と板間は南面している。この主屋（内棟）に離れて舎廊房(サランバン)・門間房(ムンカンバン)・倉庫(ソコ)・房などの並ぶ行廊棟(ヘンランチェ)が内庭(アンマダン)を取り囲み、大門(デーモン)がつく。広い家の場合は房が増える。内棟がㄷ字型の場合もある。<図4-2>

内棟の中心は大庁(テチョン)とよぶ板間で、内房(アンバン)が主室で主婦の部屋、越房は副室で子女の居室、舎廊房は主人の部屋で来客もここで迎える。伝統的な韓国住宅では重要な場所である。門間房は使用人部屋で、その他の房がある場合は子どもたちが使う。

釜屋は台所、土間でオンドルを炊くため一段下がっている。このため天井裏がタラクとよぶ収蔵庫になっていて、釜屋の隣りに続く内房から使う。井戸は外にあるので、水瓶に汲んでおく。できた料理は膳にのせて部屋に運ぶ。食事は男同士、女同士で膳を囲んで食べる。同じ部屋で食べる場合は食卓を別にするか、あるいは男が先に食べてつぎに女が食べる。場所は朝と夕食は内房、昼は板間でたべる。夏は朝昼晩と板間で食べることもある。大きい家で舎廊棟が別になっている場合、舎廊棟にも客用の台所があった。

「房」のつく部屋はオンドル部屋で、壁・天井には韓紙を張って油を塗る。建具はドア式の障子で外開きである。日本の住宅との大きな違いは玄

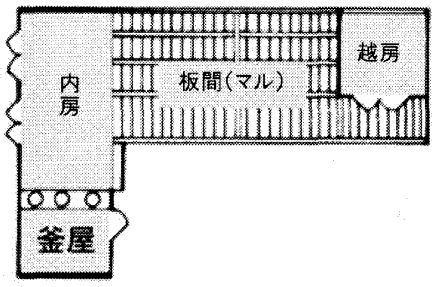


図4-1　伝統的な庶民住宅　内棟平面図

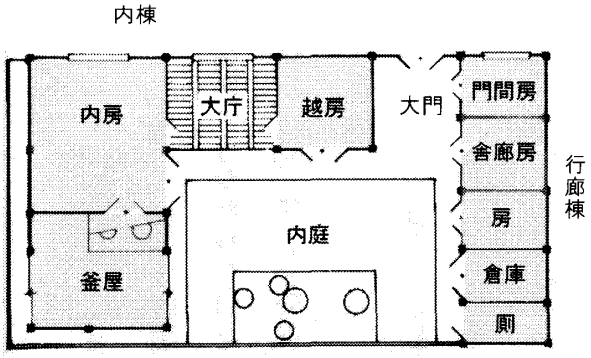


図4-2　伝統的な庶民住宅　屋敷平面図

関のようなまとまった入り口がないことで、内庭から直接それぞれの部屋に上がる。韓国住宅の場合、この内庭の役割が大きく、各室への入口のほか、結婚式・葬式・祭祠（チェサ）という祖先の祭りを行う場所にもなる。こういうときは来客が百人も来るという。日常生活でも作業空間として、キムチ漬け・かめ置場・洗濯場・物干場として使われ、光と風を取りいれる場所でもある。内庭と建物の基壇との段差は大きく、さらに板間も床高が高いので、内庭からみると、家はかなり高いところにある。建物が高いほど良い家で、このため建物を高く見せるため内庭は道路より低い。内庭が広くて深い家が良い家とされる。

中流住宅の場合も内棟の平面構成は同じだが付属空間が大きくつく。これは舎廊棟・行廊棟・祠堂棟（サダンチェ）・倉庫・便所などである。また内棟の部屋も多い。舎廊棟は舎廊房・寝房（チムバン）・舎廊大庁からなる主人の日常空間で、行廊棟は門番や使用人の部屋などが並ぶ棟である。祠堂棟は祖先を祀る祭祀空間で、主屋の裏に建つ。<図5>

庶民住宅との大きな違いは内棟・舎廊棟・行廊棟それぞれに内庭・舎廊庭・行廊庭がついて空間が分かれて独立していることである。これによって男の空間である舎廊房と女の空間である内棟と

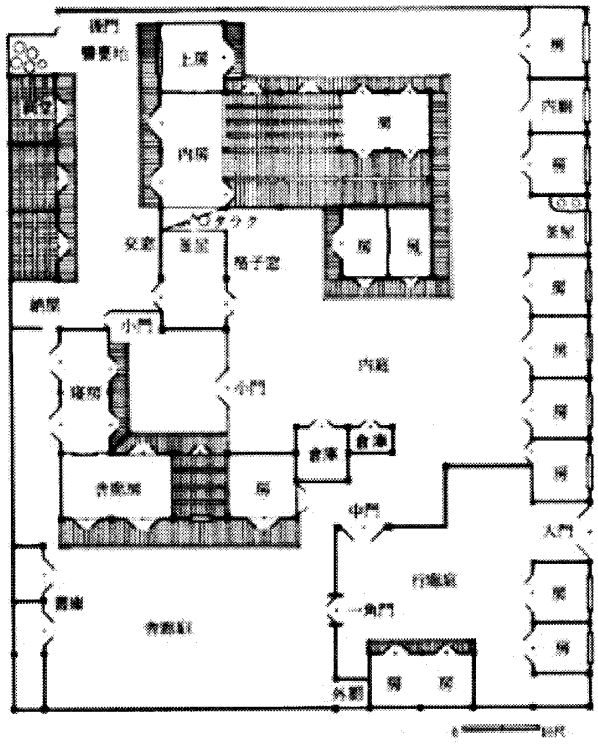


図5　伝統的な中流住宅屋敷平面図

が明確に区別されている。なお上流住宅の場合も平面構成では中流住宅と大差がない。

3. 住宅の変化　都市韓屋の出現

こうした伝統的朝鮮住宅に最初の変化が起きるのは1930年代である。

1920年代から30年代にかけてのソウルの人口増大により、古い住居地区の敷地が再分割されて、日本人の住宅と、韓国人向けの新しいタイプの住宅が建てられるようになった。日本人の場合は日本式住宅で、上層は和風住宅の玄関脇に洋館をつけた和洋折衷型、中下層は長屋式とか木賃アパートであった。朝鮮人でも一部の上流階級や「進歩的」なエリートたちには日本式の和洋折衷住宅に住む者もいた。ただ日本人でも中には冬が寒いので都市韓屋に住む人もいた。こうしたものとは別に韓国人向けの新しいタイプの住宅が建てられ、これは「都市韓屋」とよばれた。

この住宅の特徴はつぎのようなものである。不動産市場で売買される商品、つまり建て売り住宅であること。いずれも30坪前後の中小規模の住宅で、形式的には伝統的な住居形式を引き継いでいること。改良住宅であること、すなわち近代的な概念である衛生と生活方式をもとにして伝統的韓屋の不便な部分が改良されたことである。台所が床上に上がり、藁屋根から瓦屋根にし、煉瓦・タイル・ガラス・トタンなどを使用した。こうした住宅は標準化された平面を基に、伝統的な装飾の要素を取りいれて、経済的な価格で提供した。

そうした住宅の一つ、嘉會洞（カヘイドン）地区にある都市韓屋を見てみよう。

嘉會洞は朝鮮時代、両班階層が住んでいた地域で早い時期に再開発された。都市韓屋は大部分が南に開かれたコの字型の平面構成である。この類型は基本形である伝統的なL型内棟と一列型の門間棟の組み合わせによって構成されている。内棟は内房・大庁・などからなり、門間棟は門間・便所・門間房、または舎廊房などからなり、家と露地が合う境界に置かれる。建築材料は煉瓦・タイル・ガラス・トタンを使用、屋根瓦も日本式の桟瓦である。<図6>

ここで伝統的住宅と大きく変わった点は、舎廊

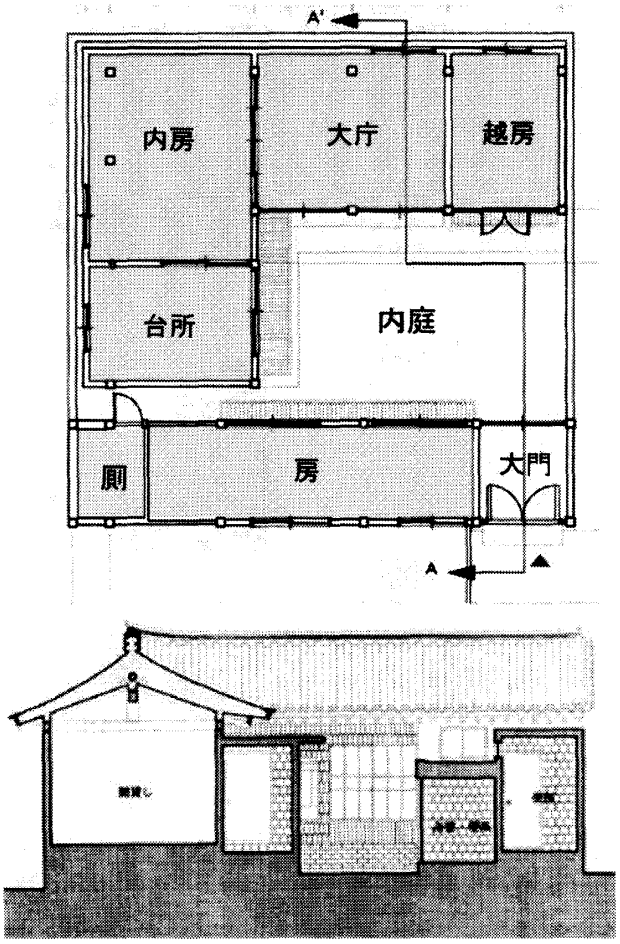


図6-1　1930年代の都市韓屋平面図
図6-2　1930年代の都市韓屋立面図

房が消失したこと、台所が床上に上がったこと、便所が室内化したことと、建築材料の変化がある。舎廊房が消失したのは、サラリーマンが増えて男性が会社に行くようになったことである。昼間は家にいないし、応接間も不要になったためである。舎廊房は貸間に使われたり、結婚した若夫婦の部屋に使われたりするようになった。舎廊房がなくなったため、内房が夫婦の居室になった。しかし板間・内庭などの使い方は変わらなかった。

こうした韓屋の変化には、日本住宅の影響が大きい。植民統治下にあって、行政や日本で勉強した建築家たちが韓屋の近代化—それはすなわち日本化であった—を推進したことによる。近代化ではもう一つ、エネルギー効率の観点から内庭をなくした「集中型」が推奨されたが、これはこの段階では受け入れられず、内房・板間・内庭などの使い方は変わらず、内庭は依然、大きな役割を持っていた。

4. 集中型の都市韓屋とアパート

1945年、日本の敗戦で植民地から解放された。だが1950年から53年までは内戦、そして戦後の混乱期と続き、50年代はまだ新しい住宅を建てる余裕はなかった。住宅が建ちはじめるのは50年代末から60年代に入ってからである。

この時期はまだ圧倒的に都市韓屋が多かったが、内庭型から集中型へと大きく変化した。台所はすでに室内化し、立式となっていたが、大庁との境を取り、一体化して大部屋にし、ダイニングキッチンとするようになったことと、内庭から上がるのではなく、玄関を設けるようになった（ちなみに玄関は「ゲンカン」とよんでいる）ことである。内庭から上がる方法は靴を脱ぐ場所が決まってないため不便だし、床が高いので上がり降りするのが大変である。老人など床に背を向けて腰掛けるようにして、尻をずらせながら脚を乗せて、やっと上がっていた。それが玄関から上がるようになって出入り口としての内庭の機能は消滅した。庭は建物の周囲に設けられるようになり、塀で取り囲んで、塀に大門がつくようになった。2階建ても多くなった。

集中型は近代化の象徴として植民地時代から推奨されていたもので、これが戦後になって急速に普及したわけである。これには衛生的とか効率的といった理由の他に、植民地時代、韓国のエリー

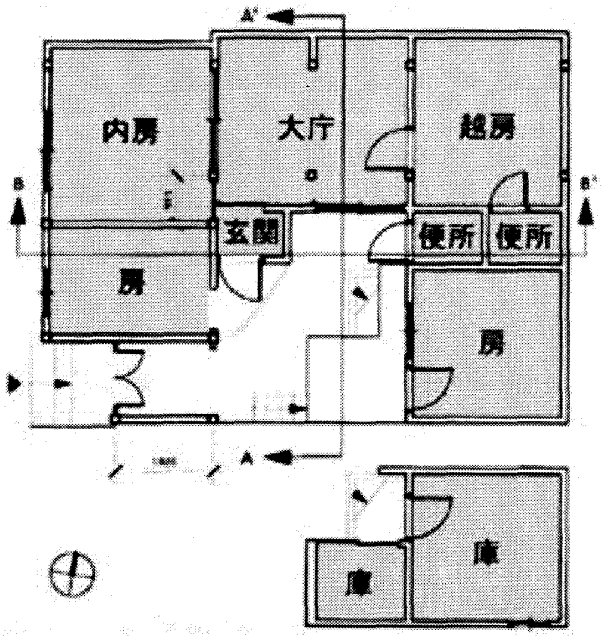


図7　集中型都市韓屋の平面図

トたちが日本式の和洋折衷型住宅を取りいれていたため、それに対する憧れもあったという。確かに韓屋には不便な所も多かったが、それを改良したいというより、文化的要求の方が大きかった。戦後の復興住宅の長屋でさえ集中型で、韓屋を活かすという考えは当時全くなかったという。

これには住宅がほとんど市場にゆだねられていたため、行政や建築家の考え方の入り込む余地がなかったことも大きかったようだ。<図7>

60年代いっぱいは韓屋の時代だったが、一方でRCの近代的な形の家やアパートがぽちぽち建ち始めた。だがまだこの時期のアパートは台所を一段低くし、天井裏にタラクを設けるなど伝統的な部分が残っていた。

5. 洋屋と高層アパート

それが70年代から80年代にかけての経済復興期を迎えて一気に変わり、韓屋が消え、一方で、洋屋が圧倒的に多くなった。

これは韓屋に変わって出現したもので、日本式の和洋折衷住宅に、アメリカ式が混じったようなもので、RCが多く、2階建も増え、多世代住宅、商住複合住宅も多い。これを洋屋とよんでいる。

その例をソウル市銅雀区上道洞の趙南稙（チョウナムチ）さんの家で見てみよう。<図8>

1967年に買った日本型の平屋住宅を、1981年に建て直したという。67年以前は30年代に建てられた都市韓屋に住んでいたという。

98坪の敷地に建坪は50坪、2階建のかなり大きな家で、もちろん集中型である。1階が高くなって、下を半地下のようにして倉庫として使っている。2世帯住宅で、2階は息子夫婦用である。1階は石段をあがると玄関で、入ると南側に広いリビング（大庁）と寝室がある。リビングの北側には玄関よりに階段があり、その裏が浴室になっている。階段の隣はDKと物置室。玄関の北にも小部屋がある。2階は南側に広いベランダのあるリビングで、続いて寝室がある。北側には勉強部屋と浴室が並ぶ。

壁は煉瓦構造でセメント仕上げ、内部には壁紙を張り、天井は主要な部屋は装飾的なパネルを張り、その他は壁紙である。床材はリビングはフローリング、寝室は油紙、建具は出入り口はドア式だが窓はガラスの引き戸、床暖房はラジエーターで、浴室はバスタブと洋式便器、台所も立式で現在の日本のキッチンと変わらない。一画にダイニングテーブルがおかれている。リビングにはソファ、息子夫婦の寝室はベッドと洋式だが、親夫婦の寝室はベッドでなく、箪笥と文匣、鏡台が並ぶ伝統的なしつらいである。この部屋は一番広い部屋であるから、韓屋の内房にあたり、ここだけは内房と呼んでいる。また主人夫婦の年代が高いせいか、内庭で行っていたキムチ漬けをはじめとした作業を行うための場所が、半地下に設けられている。

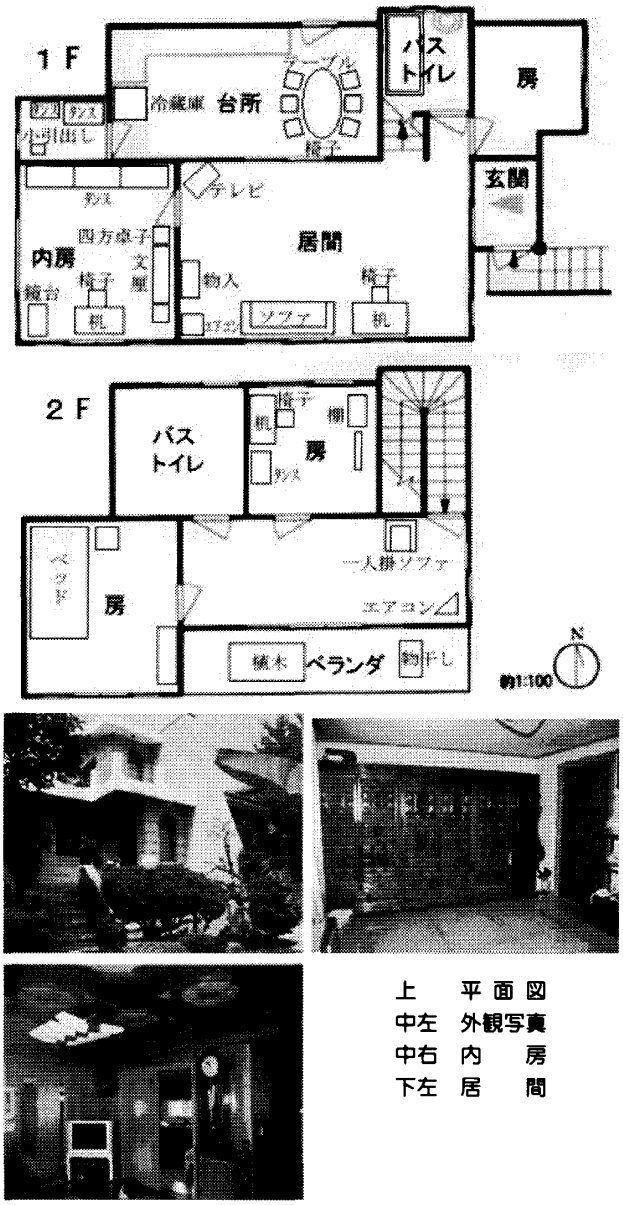


図8　洋屋　RC2階建の趙南稙家

にアパートの場合は余分な空間がないので、70年代にはいるとキムチ用の冷蔵庫が売り出された。こうした韓屋の変化には70年にはじまったセマウル運動（新しい村作り）の影響も大きいという。農村の住宅改善で、75年がピークであった。土壁からRCかコンクリートブロックに外壁を煉瓦張りとし、屋根は茅や藁から青や灰色のスレート瓦へ、床暖房、平面は集中型の都市韓屋と同じである。方形の平面で、大庁を中心に各端に玄関、部屋と台所が配され、奥の台所と房の間にアメリカ式のバス・トイレ一緒の浴室が設けられている。台所は立式、水道が引かれ、床暖房で、土足のまま入るというもので、二階建もあった。役所が基準平面を作り、これを配布して強行したため、農村の伝統的韓屋はほとんど消えたのである。<図9>

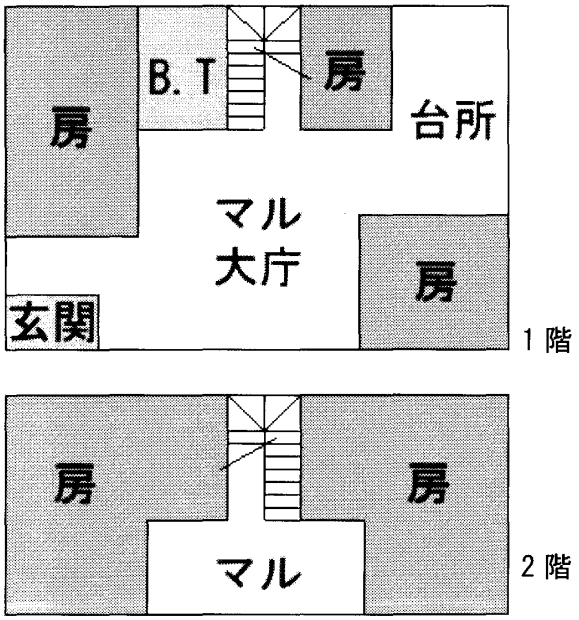
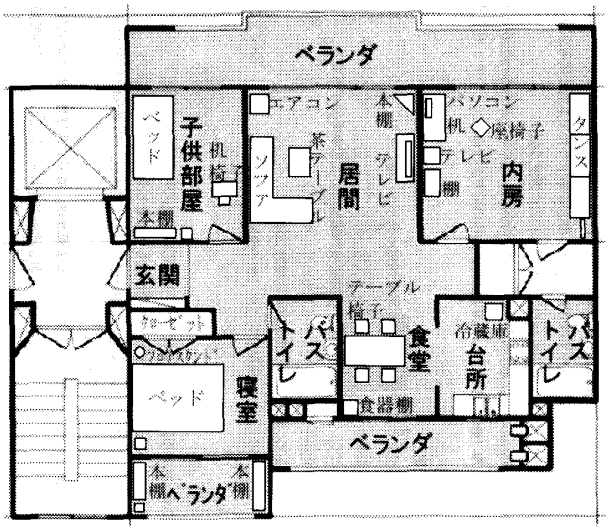
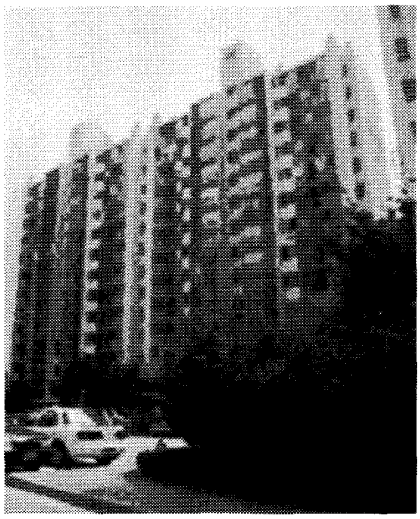


図9　セマウル運動の農村住宅平面模式図

いま一つは高層アパートの出現である。アパートの場合も集中型であるが、独立住宅よりコンパクトで、玄関を入ると両脇に部屋があり、その間を抜けて奥にはいると広い居間になっていて、この居間を中心に、ベランダを除いた3面に台所・浴室・部屋が並ぶというプランが標準的である。各部屋は壁で囲まれ、出入り口はドアになっている。そしてこうしたアパートの特徴は、インテリアのデザインが近代的、洋風で、浴室はバスタブと洋風便器がつき、キッチンをはじめとした設備がきわめて高度に整備されていることである。また80年代以降に建ったものにはベランダが前と後ろの両方につくタイプも多くなった。これはキムチのかめをおくための空間である。





上　平面図
中　外観
下　居間

図10　盆堂ニュータウン90年代のアパート

こうしたアパートの例を京畿道城南市釜堂区野塔洞、いわゆるのニュータウンの高層アパートの1軒、金サンギョンムさんの家で見てみよう。<図10>

建築年代は1994年、12棟から成り、12階から23階までで、世帯数646の団地で、日本でマンションとよんでいる民間の分譲アパートである。比較的若い世代が多い団地である。金さんは39才の会社員、奥さんの趙さんは38才で専業主婦、子供が一人で6才の幼稚園児という3人家族である。2003年に買って入居したという。

階段など共有部分を除いて全体で140平方メートル、約40坪であるからかなり広い。やはり居間を中心として、部屋が3室、ダイニングキッチン、バス・トイレの浴室が2つ、玄関、ベランダが3つついている。バス・トイレの部屋が2つあるのは、1つは家中で使うもの、1つは内房にあたる一番大きな部屋専用である。ベランダは、居間の正面と台所の後ろのほか、玄関脇の部屋の前にもこの部屋専用のベランダがついている。

金さんの家では玄関脇のベランダつきの部屋を夫婦寝室としてダブルベッドを置き、それに向かい合うやや小さい部屋にベッドを置き子供部屋とし、居間にはソファ・茶卓子・テレビなど置いて、家族や来客との団欒空間としている。内房には箪笥や机、テレビなど置いて、親や親戚などが来たときに泊める予備室としている。キッチンにはガス台・オーヴン・調理台・流し・電子レンジ・収納戸棚・冷蔵庫などが並んで、居間に近い側にダイニングテーブルを置いている。ベランダには外側にもサッシュを入れて室内化しているのでサンルームのようで、居間側のベランダには観葉植物などを並べ、キッチン側のベランダにキムチの甕などを置いている。寝室の前のベランダは本棚を置いて部屋として使っている。白い壁、戸棚などもすべて白で、玄関の土間はグリンのタイル張り、床はフローリング、家具も洋風で、内房の箪笥がやや韓国風だけで、まったく伝統とは切り離されたインテリアである。

6. 高層アパートの発展と韓屋の見直し

2000年に入るとさらに盆堂の東にパンギョというニュータン開発されている一方、ソウル市内の老朽化した建物を取り壊して、高級高層アパートが建てられるなど、現在の韓国では高層アパート化が大変な勢いで進行している。ちょうどソウルを訪れた2004年夏、ソウルの中心鎮路通りに面した場所で超高層・超豪華なアパートが入居者

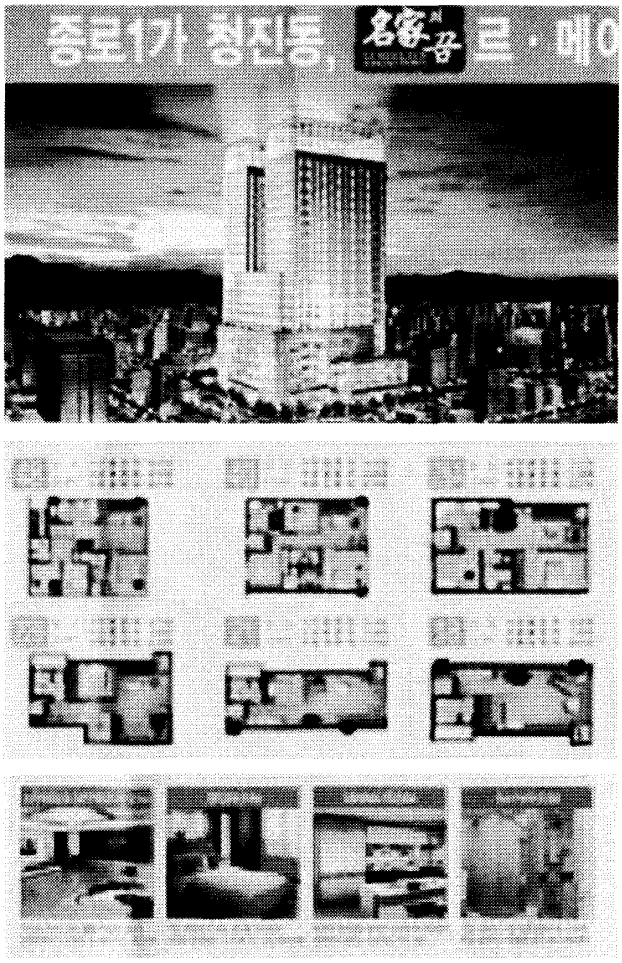


図11　ソウルで売り出し中の高層アパートのパンフレット

を募集中で、モデルルームを作ってパンフレットを配っていた。<図11>

しかし最近になって少しずつではあるが、伝統文化の見直しの中で、韓屋の見直しが始まっている。たとえば補助金を出して伝統的韓屋を保存しようとする自治体もあり、この場合は外観と内庭のデザインが伝統的ならいいとか、ソウルでは残っている都市韓屋をリニュウアールして住みたいという人がでてきたりしている。

そうしたリニュウアールの仕事を手がけている一人に建築家の趙鼎九さんがいる。彼は自分でも1950年代の都市韓屋を買って、リニュウアールして住んでおられる（ソウル市西大門区忠正路）。彼の場合、内庭のある伝統的な平面構成の韓屋だが、これはそのままに活かして、設備、とくに台所や浴室の設備を近代化することで、韓屋の住み

上　平面図
下　室内

図12　50年代の都市韓屋をリニューアルした趙鼎九家

づらさを取り除いている。ただしこうした例は数からいったらごく僅かである。<図12>

以上、整理すると、大きく見れば戸建住宅から集合住宅（アパート）へ、ということであり、戸建て住宅の場合は1930年代に都市韓屋が生まれ、これは内庭型であったが、1960年代に集中型になるが、1970年代に入ると韓屋が消えて洋屋となり、多世代住宅、商住複合住宅が生まれ、RCが多くなる。70年代から90年代にかけて新市街地が開発され、ニュウータウンが生まれ、アパートは高層化し、200年代にはさらに新市街地が拡大し、超高層アパート群のニュータウンが発展している、ということである。

短期間の調査であり、またこちらの知識不足で見落としたところや間違ったところも多いと思うが、大きく見れば伝統的な住文化が失われ、洋風化、近代化していっているということである。この点は日本も共通しているが韓国の場合、その変化はより過激のようである。それには韓国の場合、先にも述べたように市場経済に任されている部分が多いことが大きいようだが、その代わり、日本のマンションより広いし、価格も安い。ただこの問題についてはそれ以外にも様々な要因があるが、それについてはここで扱うべき問題ではないので、実情報告だけにしておく。

参考文献

・吉田光男「漢城の都市空間―近世ソウル論序説」<『朝鮮史研究会論文集』第30号1992>
・朱南哲・野村孝文訳『韓国の伝統的住宅』九州大学出版会1981